

令和7年度 中部縦貫自動車道と中央自動車道長野線を連結する
松本JCTの建設事業に伴う発掘調査

みなみくり いせき

南栗遺跡現地説明会 資料

令和7年(2025年)9月13日(土)

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 令和7年度調査の概要

所在地：松本市島立・和田地籍

調査期間：令和7年4月14日～11月28日(予定)

調査面積：8,100㎡

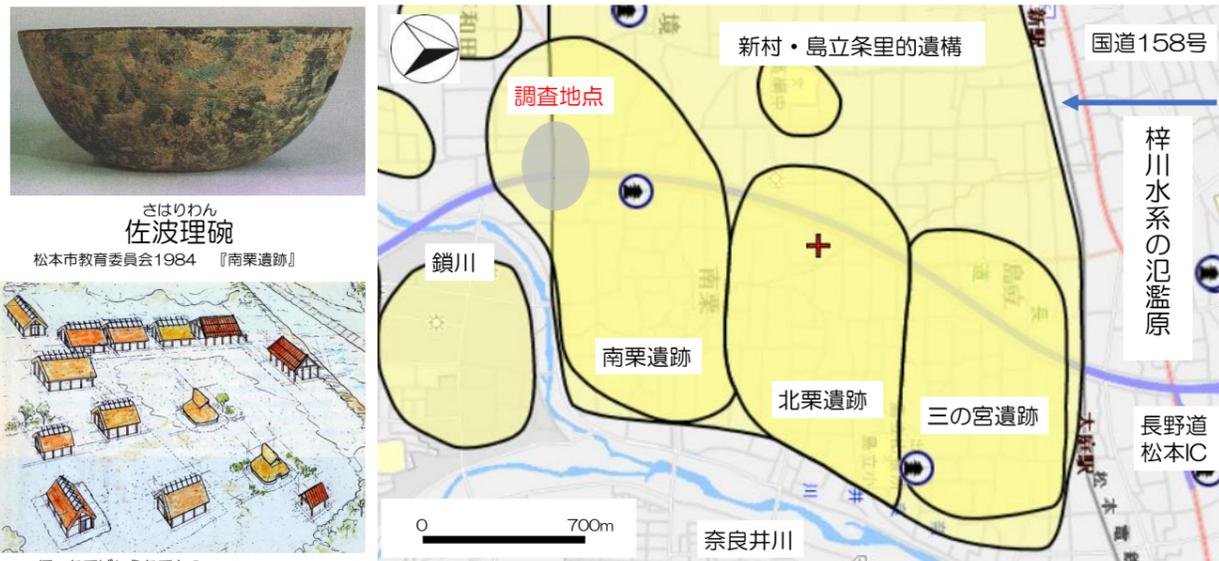
今年度の調査成果：遺構 竪穴建物跡93軒、土坑236基、溝跡7条、柵列5基、鍛冶炉1基
遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、鞆の羽口、砥石、鉄滓

2 これまでの調査成果

南栗遺跡は、松本市教育委員会が圃場整備に伴い1983年から1999年にかけて発掘調査を実施し、当センターが長野自動車道建設に伴う発掘調査を1985年から1986年に実施しました。そして、2022年から松本JCTの建設事業に伴う発掘調査を開始し、今年度は4年目となります。

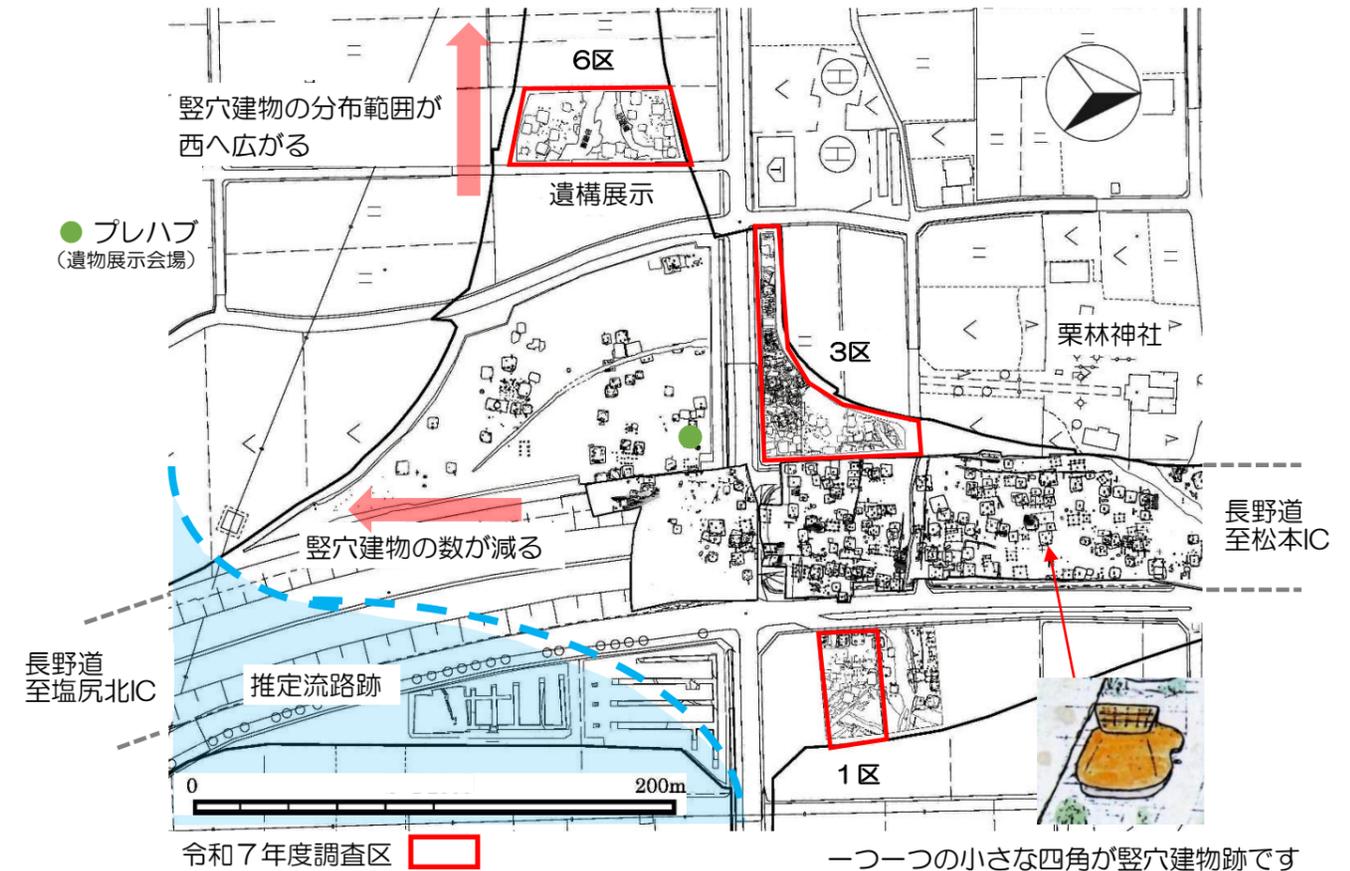
これまでの調査の結果、古墳時代後期から平安時代後期まで、約500年間にわたる人々の生活の跡が確認され、松本盆地最大級の古代集落であることが判明しました。

以前の調査では、古墳時代終末期の竪穴建物跡から銅製の佐波理碗が出土し、奈良時代の掘立柱建物跡が並ぶ区画を確認しました。このことから、南栗遺跡は畿内政権との関係が推測されます。



松本市遺跡地図 (松本市デジタルマップより引用)

長野県埋蔵文化財センター1992『いま信濃の歴史はよみがえる』



一つ一つの小さな四角が竪穴建物跡です
長野県埋蔵文化財センター1992『いま信濃の歴史はよみがえる』



1区空撮状況(北東から)



3区空撮状況(東から)

また、これまでの調査で竪穴建物数は調査範囲の南側で減少する傾向があり、集落の南端を確認しました。集落の南側が鎖川の氾濫原であり、洪水の影響を受けやすい場所であったため、洪水を避けた場所にムラを形成したのではないかと考えられます。

3 令和7年度の調査成果

今年度は1・3・6区の3か所で調査を行っています。

そのうち、今年度調査を開始した6区では竪穴建物跡が数多く確認されており、集落がさらに西側へ広がっていることがわかってきました。

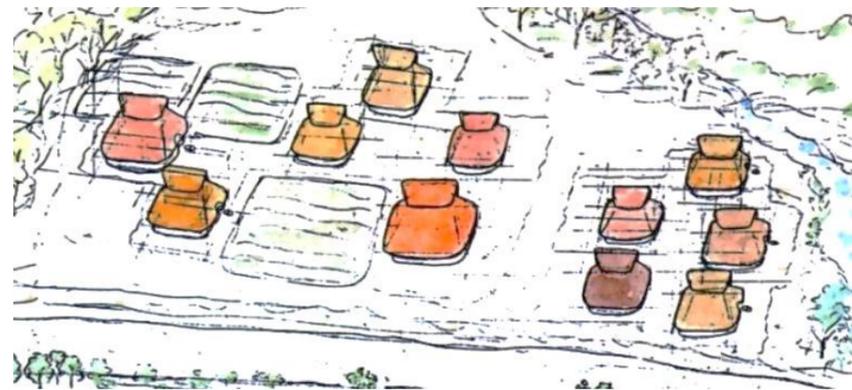
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL:026-293-5926
MAIL: maibun@naganobunka.or.jp HP: <https://naganomaibun.or.jp>
担当: 廣田/大泰司/鈴木/二ノ宮
支援業務(株)シン技術コンサル: 松田/安生/重留
(株)島田組: 西尾/鍛冶屋/國分

4 ムラの姿を復元する

6区では竪穴建物跡を28軒検出しました。平面形は四角です。建物跡は重複したり近接して検出される例があり、全てが同時期に存在していたとは考えられません。出土する遺物の時期から、大きく奈良時代と平安時代に分かれることがわかってきました。1辺が6~7m程度の建物跡が奈良時代、5m前後の建物跡が平安時代に該当します。

建物跡の向きは、両時代とも壁面を方位に合わせる傾向があり、一定の間隔をあけて同じ向きの建物が並んでいたと推測されます。

本地区は、有力者が居住する大きな建物や、有力者の持つ遺物が存在しないため、一般の人々が暮らした場所と思われます。



集落の想像図

長野県埋蔵文化財センター1992
『いま信濃の歴史はよみがえる』

5 流路跡を発見

6区の調査区中央では自然の流路が確認されました。洪水を起源とするものかもしれません。

南栗遺跡では多くの流路跡が確認されていますが、流路跡より新しい建物跡が発見されているため、この地に継続的に居住したことがわかります。



流路跡が残る調査区(令和6年度1区)

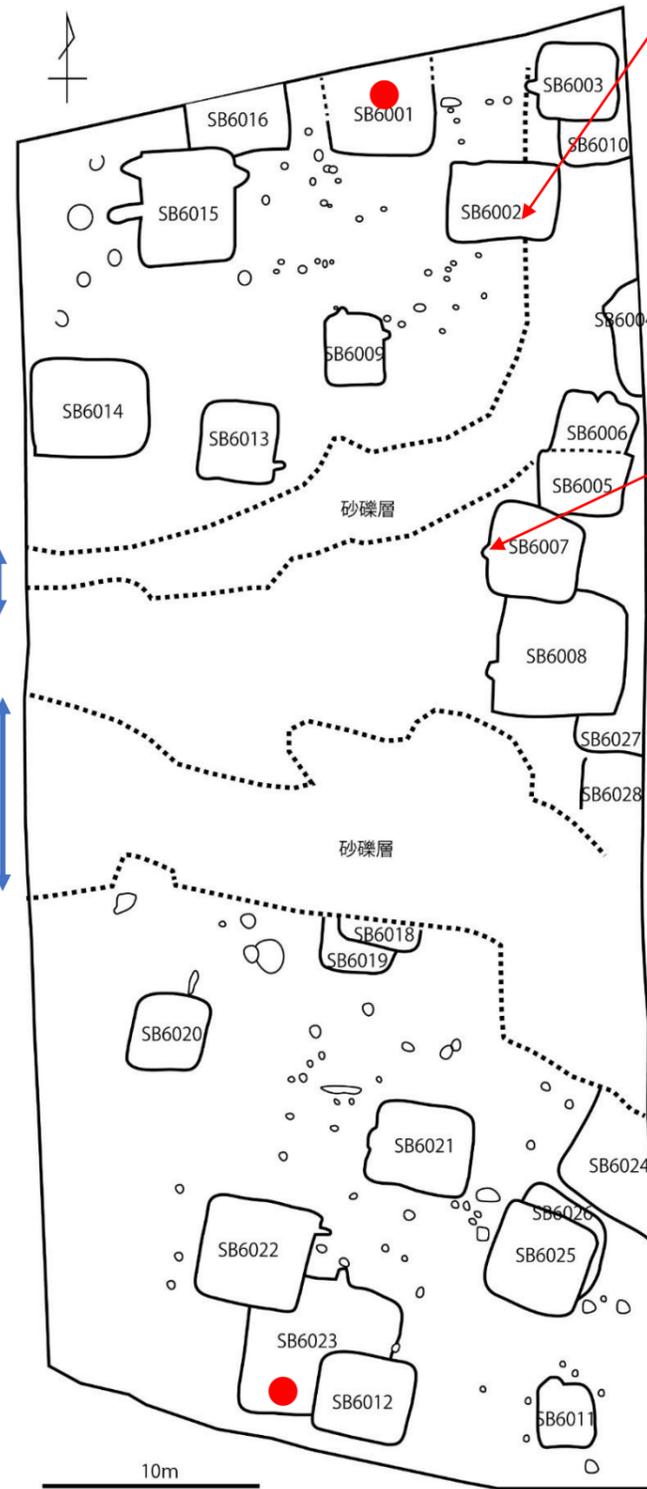
6 家の中の灯り

竪穴建物跡からは建物内の照明に用いた器が出土しました。日常使用する食器(碗や皿)に油を注ぎ、麻やい草から作った芯を浸して明かりを灯しました。食器の縁には黒い煤がついています。



とうみょう かいゆうとうき
灯明として使われた灰釉陶器

南栗遺跡 6区遺構配置図



● 奈良時代の竪穴建物跡

印のないものは平安時代の竪穴建物跡の可能性が高い

7 鍛冶炉を発見

竪穴建物跡内で小さな穴を検出しました。穴の壁から底に火を受けた痕跡があり、その周辺からは炉に空気を送る鞆の羽ふいこの羽はや鉄を鍛えたときに飛び散った細かい鉄滓てつさいが出土しました。この穴は鍛冶炉と考えられます。

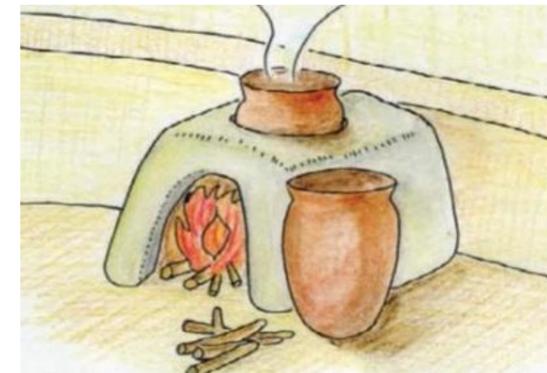


鍛冶炉の跡

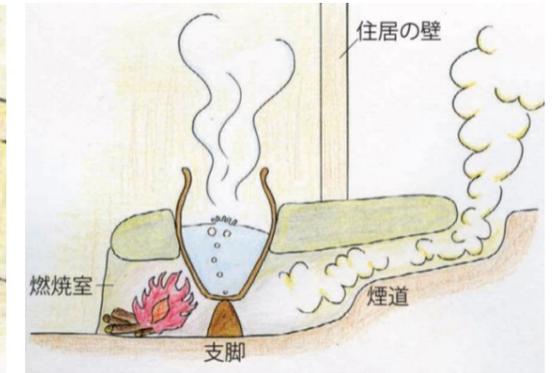
8 壊されたカマド

竪穴建物跡の壁には調理場であるカマドが作られます。粘土でカマドの壁と天井を形作り、壁の芯材には大きな石を使い、天井には穴を開けて煮炊きをする甕を差し込みます。調査中、多くのカマドは破壊された状態で見つかります。

カマドは火の神が宿る特別な場所と考えられており、建物を廃棄する際にカマドを破壊する習慣が存在したようです。この建物では、カマドの一部を破壊し、その後、火床の上に支脚石を叩き折って置き、さらにその上に底を抜いた甕を立て、周りを芯材の石(花崗岩)で囲う様子が確認できました。



カマド(使用時)



カマドの構造 長野県埋蔵文化財センター2005『三角原遺跡』



壁の芯材を一部残す破壊されたカマド



奥壁に底を抜いた甕を立て、周囲を芯材の石で囲むカマド